

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

重組現象の通時的的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2632

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



博士論文審査の要旨

本論文は、中国語音韻史における重要なテーマの一つである「重紐」の通時的変遷を扱ったものである。重紐とは、韻書において一つの三等韻内部で唇牙喉音声母の小韻に限り同一声母の対が存在する現象を指す。初期の韻図では一方が三等の欄、もう一方が四等の欄に配され、一般に三等欄に配される小韻を B 類、四等欄に配される小韻を A 類、重紐の区別がない三等韻を C 類と呼ぶ。

これまで、重紐の現象については個別の資料を対象として、区別の有無とその所在、および関連する事象に着目する形で研究されることが多かったが、本論文の基本構想は重紐を一種の通時的音韻現象と捉えることであり、歴史言語学の手法に基づき、共時的側面にも目を配りつつ、重紐現象の変遷過程を俯瞰している。

第 1 部「序論」では重紐現象の発見とその研究史についてまとめ、第 2 部「記述編」では対象となる重紐韻の範囲を定めるとともに、重紐韻の共時的特徴を分析する。第 3 部「分析編」では中古から近世に至る 19 種の資料を用いて、韻ごとに反切上字と反切下字について分析し、重紐韻の通時的変遷について論じる。第 4 部「個別の問題」では関連する現象について考察し、第 5 部では結論を述べている。

本論文は、長い研究史を有する問題に敢えて取り組み、膨大な数の資料を統計的に分析することによって、独自の結論を提示するに至った点において大いに評価できる。その一方、個々の資料の性格に関する検討がなお不十分であること、先行の学説について時に自分の立場を明示していないこと、近世の対音資料に対する独自の校勘作業が不十分であることなどの問題点も指摘できる。しかし、本論文の立論・論証過程に大きな瑕疵はなく、中国語音韻史上の重要問題に対し現段階での一到達点を示し、今後の議論に資する礎石を築くことに成功したという点で高く評価できる。

以上の理由により、本審査委員会は、本論文が博士学位請求論文として、一定の基準に達しているものと判断する。

論文審査結果

本論文は、本論が第 1 部「序論」、第 2 部「記述編」、第 3 部「分析編」、第 4 部「個別の問題」、第 5 部「結論」に分かれ、さらに資料編として、I 「各資料における反切一覧」、II 「重紐字漢音対音表」、III 「『蒙古字韻』、『古今韻会举要』重紐字一覧表」が付されている。

第 1 部「序論」では重紐現象の発見と研究史について述べる。重紐反切の発見については、清の江永と陳澧、日本の本居宣長と石塚龍麿の業績について詳しく紹介するとともに、陳澧の発見の方が学史的な意義が高いこと、本居・石塚両氏の貢献も中国側に劣らないことを述べる。また、近代以降の重紐研究史を概観し、中古重紐両類の間には実質的な音韻的対立があり、その違いは、音韻論のレベルでは唇牙喉音声母における口蓋化の有無によって区別されるが、音声レベルにおける差異は、資料によって頭子音にあ

る可能性もあれば、拗介音や主母音にある可能性もあるとする。本章では、長きにわたり、かつ諸説が錯綜する重紐の研究史を丹念にたどり、重紐兩類の区別について概ね妥当な結論を導き出していると言える。

第2部「記述編」では、対象となる重紐韻の範囲を定めるとともに、中古音、近世音および域外対音の代表的な資料を取り上げ、重紐韻の共時的特徴について考察している。まず、分析の手法である「類相関」（重紐反切においてA類帰字、B類帰字がそれぞれB類上字、A類上字をとらない現象）について検討し、音韻論的観点からその成立要因を口蓋性の有無に帰した上で、それをもとに、これまで重紐韻に含めるか否かで議論のあった庚清韻と幽韻を分析し、両者の帰属に揺れが生じる原因を主に南北語音の差異に求めている。また、中古音の資料として『博雅音』と『可洪音義』、近世音の資料として『古今韻会举要』と『蒙古字韻』、域外対音の例として日本漢音を取り上げ、互いのペアを比較した上で、その共通点と相違点を析出している。本章で扱われた幾つかの音韻現象や資料の性質をめぐっては、さらなる検討が必要とされる部分もあるが、それぞれの議論は丁寧かつ網羅的に進められており、一定の評価が与えられる。

第3部「分析編」は、17種の中古音資料、即ち(1)『經典积文』徐邈反切、(2)『字林』、(3)『玉篇』、(4)『經典积文』陸德明反切、(5)『博雅音』、(6)『漢書注』、(7)『文選音義』、(8)『玄扈音義』、(9)『宋跋本王韻』、(10)『毛詩音』、(11)『晋書音義』、(12)『慧琳音義』、(13)『可洪音義』、(14)『説文解字繫伝』、(15)『希麟音義』、(16)『広韻』、(17)『集韻』、及び2種の近世音資料、即ち(1)『蒙古字韻』、(2)『古今韻会举要』を対象として、重紐反切における下字と上字の分布状況を通時的に考察したものである。その結果として、反切帰字の類帰属の変化は、陽声(鼻音)韻尾を持つ韻が陰声(母音)韻尾及びゼロ韻尾を持つ韻よりも早く現れ、その後の変化の速度も速いという知見を得るとともに、重紐韻の変遷過程を次のように描いている。(一) 声母の弁別機能が強くなり、韻母の弁別能力が弱くなる(前中古期)、(二) 陽声韻尾を持つ韻をはじめ、牙喉音合口字、唇音字、牙喉音開口字において重紐兩類の区別が消失していく(中古期～『字韻』、『举要』の時代)、(三) ごく一部の方言を除いて、重紐兩類の区別が消失する(『字韻』、『举要』以降)。大量のデータによって裏打ちされた本章の考察結果は、それ自体に新規性がなくとも、重紐の通時的変遷をめぐるとする大きな傾向を描いたものとして、十分な説得力を有すると言える。

第4部「個別の問題」においては、重紐現象に関連する三つの問題を取り上げて論じる。まず、一等上字の問題では、重紐反切の上字となる一等字には「易識・易読・易写」と「合口的性格」という二つの特徴があり、『集韻』における一等上字の多用は一等韻字に生じた音韻変化に起因するものではなく、『集韻』が先行小学書から大量の異質成分を吸収した結果であると述べる。次に、重紐対立の無い舌歯音音節の音声特徴については、精組、章組、日母、以母に属する字は重紐A類的、莊組、知組、来母、云母に属する字は重紐B類的な傾向を持つとする。また、いわゆる「分向合流」(まず重紐四等

韻と純四等韻、重紐三等韻と非重紐三等韻との間で合流が起こり、その後三等韻と四等韻が合流する現象)は、江南讀書音資料において先んじて発生したと述べている。『集韻』の特徴や江南讀書音の性質についてはなお検討の余地があるが、本章におけるそれぞれの結論は概ね首肯できるものである。

そして、最後の第5部「結論」では、以上の4部における考察から得られた新たな知見をまとめる形で結論としている。

以上に概観してきたように、本論文は重紐とそれに関連する現象について全面的な記述を行い、極めて多くの文献を扱って詳細に分析している。その結果、長い研究史を持つ中国語音韻学史上の一問題について、その全体像と問題点を整理し、大量のデータ処理を通じて説得力のある結果を提示することに成功したと言える。個々の資料の言語的性質についてなおも検討の余地があること、先行の学説に関する自身の立場について説明が不十分であること、近世音資料の扱い方に慎重さを欠く部分があることなどの欠点も認められるが、本論文はその総体をもって中国語音韻史の研究をさらに前進させることに一つの大きな貢献をなしたと評価できる。

最終試験結果

最終試験は2022年2月1日(火)午後3時から、オンライン会議の形で実施され、竹越孝(主査)、濱田武志、太田斎の本学教員と、山口大学大学院東アジア研究科の更科慎一准教授が審査にあたった。審査は公開で行われ、冒頭、学位申請者が論文要旨に関するプレゼンテーションを行った。そののちに各審査委員が論文に対する意見を述べると同時に質問を行い、申請者がそれぞれについて回答するという形式で進められた。本論文は日本語で執筆されたため、論文要旨の説明と審査委員との質疑応答も日本語で行われた。

審査委員からは、中古音資料における反切の伝承関係、音声的実体と音韻論的解釈の区分、近世音資料特に『蒙古字韻』のパスパ文字表記に対する扱い、いわゆる「江南讀書音」の性質などの問題をめぐって幾つかの質問とコメントがなされた。それに伴い、今後さらに検討すべき課題を指摘されることとなったが、審査委員の質問に対して、申請者は本論文の内容に即して誠実な態度で回答を行ったと判定される。

公開審査の終了後、全審査委員で合議を行い、本論文に対する評価を持ち寄ったところ、本論文が中国語学研究に対して大きな貢献をなす成果であるとの点で合意が得られた。よって、最終試験の評価を「合格」とすることが決定された。